新潟県小学校長会報
校長会報
題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区万代1−3−30
万代シテイホテルビル3階
ＴＥＬ　025−290−2231
ＦＡＸ　025−245−6060
E-mail：nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所　株式会社 文久堂

学校づくりは、人づくり

新潟県小学校長会　副会長
山田浩之

師走を迎えると、次年度のことに思いを馳せるようになります。春四月、その学校に居ようが居まいが、現校長には、その時点での学校づくりの最善のビジョンを立てる責任があります。

昨年度、上越で行われた研究集会でご講演をいただいた 国立教育政策研究所 前所長 浅田和伸氏は、別のところで次のようにお話されています。

「いくら有能な校長でも、一人でできることはしれています。教員をはじめ大勢の職員がそれぞれの仕事に精一杯当たることで、初めて学校は成り立ちます。基本は信頼し、任せることです。これは「長」として絶対に必要ですが、難しいことです。私が意識しているのは、誰に何をどこまで任せるかをはっきりさせること。そして、任せた以上は口を出さない。（中略）任せるには勇気が要ります。何が起きようと、責任を取るのは校長です。」

このお話を、私は学校づくりの大要として受け止めています。

そして、この「任せる」は、人材育成の要諦でもあると考えています。人は、任されることでその力を発揮し、成果を上げても失敗しても、その分、力を高めていくものです。

校長会員の皆さんなら、これまでの長い学校等勤務の中で、これは自負できるという実践や取組の一つや二つはあるはずです。それは、何かしら仕事を任され、自ら考えて事を進めた結果だったと思います。そして、その頑張りの過程で、自らの力が高まったことを自覚している人も少なくないことでしょう。

学校づくりのビジョンを立てても、人材がいないという話を聞くことがあります。しかし、それは違います。学校づくりのビジョンは、人づくりのビジョンでもなければなりません。校長には、学校と職員の両方を向上させる責任もあります。

全連小・島根大会報告

大会の概要

十月十四日、第七十四回全国小学校校長会・島根大会が開催されました。過去二年間は誌上発表だったため、島根県小学校長会は、「何としても学びを止めない」との強い思いで検討を重ね、全国一八五一九名の全会員に大会要項を事前配付しました。発表者は、松江と東京いずれかの会場に集合し、二会場と全国をオンラインで結び、当日のライブ配信と約十日間のオンデマンド配信を行いました。島根県小学校長会のご苦労は計り知れませんが、新たなスタイルでの研修が提案されたことは、素晴らしいことと感じました。

大会主題は『自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進』、副題は「ふるさとの学びを原点に　主体的・協働的に学び合い　豊かな未来社会を創る子どもの育成」でした。

全体会では、島根にゆかりのある識者による鼎談が行われました。「予測困難な時代を生き抜いていく子どもたちの原動力として、自らが生まれ育ったふるさとの自然・歴史・文化が学びの原点になり、そこでの人との結び付きや学びが未来社会を創る意欲につながるのではないか。」というメッセージは、私たち校長への提言であるとともに、大会主題及び副題を究明する良い機会となりました。

部会は、五領域で十三分科会からなりました。私は、『Ｖ教育課題　社会形成能力を育む教育活動の推進』部会に参加し、岩手県と山口県の実践を伺いました。山口では、県の取組として社会形成能力育成に向けコミュニティ・スクールを核として進めています。素晴らしい活動が行われていても、職員の異動やウイルス禍により、充実した活動を維持させることは難しいです。協議会では、「校長は、学校を開き、地域と学校とを繋ぐ役割を担い、地域に貢献する学校を創ること」、そして「どんな力が付いたか」「持続可能か」「地域社会の要請にマッチしているか」ということを意識すべきであるという共通理解が図られました。校長の果たすべき役割と指導性について改めて学ばせていただきました。

長岡市三島郡小学校長会では、全会員にオンデマンド配信の告知ができたので、大勢の方々が自由な時間に視聴しました。

大会の概要

関ブロ・群馬大会報告

六月九日、十日の両日、第七十四回関東甲信越地区小学校長研究協議会・群馬大会が開催された。新型ウイルスへの対応により、一昨年度の茨城大会、昨年度の栃木大会と二年続けて誌上開催となったため、三年ぶりの対面での開催となった。

大会主題は「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題は「自らの可能性を高め　互いを認め支え合い　たくましく生きる力をはぐくむ学校経営」である。

研究協議は、大会二日目に五領域、十二分科会に分かれ、分散会場方式で行われた。

私は第Ⅳ領域「危機管理」の「健全育成」第十四部会に参加をした。部会では「家庭・地域、関係機関と連携したいじめ防止対策等健全育成に関する提言」とし、「いじめや不登校等に対応できる実効性のある校内体制の整備」を視点に二事例についての発表、協議が行われた。

予防的な取組や魅力ある学校づくり、職員の力量形成とともに、学校だけでは解決が難しい事案が増えたことにより、教育委員会や関係機関、地域との連携を積極的に進めていた。例えば、発表①では、不登校対応として、加配教員や地域ボランティアを活用した「校内中間教室」を設置し、児童の居場所づくり、学びの場の保障が紹介された。また、登校支援コーディネーターを中心に「登校支援委員会」「スクリーニング会議」などを開催し、教育相談員やSSW、SC等との連携を図り、総合的な支援を進めていた。発表②では、町一体となった教育支援センターや通級指導教室と連携した取組、町独自予算でもSCを配置した手厚い支援体制、教育・医療・福祉・保健などの機関で受けた相談や支援内容をまとめた支援ファイルの運用など、小さな町ならではの利点を生かした取組が紹介された。

児童の健全育成のためには、学校・家庭・地域・関係機関が協働し、多くの目で見守り、多面的に支援をしていくことが大切である。この協議会では、実効性のある協働体制の構築と積極的な外部連携を中心に、校長のリーダーシップと役割について改めて学ばせていただいた。

郡市政令指定都市だより

ふるさと三条を誇りとし、夢を紡ぐ人づくり

～小中一貫教育の深化、発展を目指して～

三条市小学校長会

「ものづくりのまち」として、発展してきた三条市である。市内の小学生は小刀体験や和釘づくりを、中学生は包丁研ぎなどを学んでいる。また、七月には鍛冶ミュージアムと科学教育センターを併設した図書館等複合施設「まちやま」が開館し、たくさんの人が集うようになるなど、ちょっと自慢したくなる賑わいを見せている。

一　定例活動

三条市小学校長会は、義務教育学校を含め、二十名の会員で構成されている。毎月の活動は、市教委主催の定例校長会の後に実施し、前半は、小中合同での校長会である。九つの学園それぞれに特色ある小中一貫教育を進めており、小中共通の課題などについて話し合い、解決を図っている。

後半の小学校長会では、ウイルス禍においても、地域性や各学校の特色を生かすよう、知恵を出し合って小中一貫教育の深化、発展に努めている。

二　研修

研修は、年三回実施している。毎年、テーマを設定し、研修部が中心となって運営している。

近年では、「学校事故への対応」「子どもの問題行動から考える危機管理」「ＩＣＴ教育の推進」などについて研修を深めてきた。

今年度は「三条市の特色を生かし、地域とともに歩む小中一貫教育の充実」をテーマに研修を実施している。第一回目は、中越教育事務所社会教育課副参事を講師に招き、「地域と学校の連携・協働を促進するコミュニティ・スクールの在り方」について研修を深めた。また、県小教研学習改善調査研究事業報告会も毎年実施している。協力校からの報告を基に学力向上への取組を強化している。

令和五年度には、県小学校長会代議員会が三条市にて開催される。現在、心を込めて準備を進めている。こうした協同作業も懇親会で親睦を深められないウイルス禍においては、絆を深める貴重な機会となっている。

これからも夢にあふれる子どもたちのため、三条市の教育をリードする校長会でありたい。

学校紹介

地域への愛着や誇りを高め 自分の生き方を考える「善兵衛学習」の推進

上越市立高士小学校

頸城平野の穀倉地帯にある高士小学校は、来年度、創立一五〇周年を迎える歴史と伝統のある学校である。全校児童数四七名の小規模校である当校には、全国に誇れる活動がある。それが、「善兵衛学習」である。

平成十九年度、当時在籍していた職員がここにしかない地域教材として見いだした「日本ワイン葡萄の父」と呼ばれる川上善兵衛翁。善兵衛翁は、地域の素封家として、当時の高士村政にも関わり、村長として現校地に高士小学校を移転させるなど、現在の高士小学校の礎を築いた人でもある。その生き方や功績を学ぶ「善兵衛学習」は、当校の教育課程の中核となり、生活科や総合的な学習の時間の活動のテーマになっている。

当校は校地内に葡萄棚を設置しており、毎年、三、四年生が地域の方の指導を得ながら栽培活動に取り組んでいる。特に、善兵衛翁が品種改良した葡萄のマスカット・ベーリーＡを、地域の方々に食べてもらえるよう、毎年、工夫しながら販売活動を行っている。

また、校区内には善兵衛翁が開園した日本を代表するワイナリーである『岩の原葡萄園』があり、五、六年生が職場体験学習として、葡萄園の協力を得ながら、様々な活動を体験している。

本物の体験から、善兵衛翁の生き方だけでなく、自分自身の生き方を考える貴重な機会となっている。

さらに、「地域の方が善兵衛学習に理解を示し、参画してくださる」「地域住民も、地域での子どもの発表を通じて、地域の偉人川上善兵衛翁についての『学び直し』を行い、その価値を再認識している」等、地域と連携し多くの学びを生み出している。

人々の豊かな生活を願い、地域づくりに取り組んだ川上善兵衛翁の偉業の数々とその志、生き様が善兵衛学習の実践と成果を支えている。

学校紹介

地域とともにある 学校を目指して

胎内市立中条小学校

創立一五〇周年の当校では当時の面影を伝える「三遷橋」や「赤レンガ門」が、今も四一一名の「つばさっ子」を優しく見守っている。

コミュニティ・スクールとして、「地域を愛し、地域に愛される中条小」を合言葉に「本物に向き合わせること」と「地域とのつながりを大切にすること」を基軸に、それを支える四つの組織（ＰＴＡ・後援会・つばさっ子ボランティア・つばさ会（地区の区長会））が、各組織の持ち味と強みを生かした取組を進めてくれている。

一　ボランティア活動

こいのぼりや門松などの季節感あふれる掲示・展示を行う「環境」、毎週月曜朝の「読み聞かせ」、校外学習や教科指導の支援を行う「学習支援」、登下校の安心・安全を見守る「通学」などのボランティアが、つばさっ子の豊かな学びを支えている。

二　本物と向き合う体験

昨年度は、卒業生で「ＮＡＭＡＲＡ」で活躍していた金子ボボさんから「いじめに関する話」を、今年度は四年生まで在籍し、北京オリンピック・スキークロスに出場した須貝龍さんから「夢をもつことの大切さ」について熱く語っていただいた。

また、「つばさっ子秋祭り」では子どもたちのニーズを大切にしながら、地域の方を講師に茶道や木工細工など約二〇の体験教室を設けている。地域の資源である「ひと・もの・こと」の活用を通し、貴重な体験の機会を得ている。

三　周年行事と校舎新築

周年行事として、運動会で全校児童が夢と希望を記したバルーンを大空に放った。また、「つばさっ子寄席」を企画し、三笑亭夢丸さんから落語を披露していただいた。さらに、校舎新築に向け、六年生とＰＴＡ役員が中心になり「思い出校舎プロジェクト」を立ち上げ、壁画の制作やフォトブックの作成を行う計画である。

ふるさとを大切に思う気持ちや人の温もりを感じる心は、いつの時代もどのような環境であろうが変わらないものと確信している。

郷土風土記

日和山登山を、是非！

創立九年目の日和山小学校。この校名が好きで好きでたまらない。「日和山」である。「日和見」を行う「山」であり、水先案内（水戸教）を行う場所である。

二〇一九年に開港一五〇年を迎えた新潟の「みなと」。北前船の寄港地として栄え、幕末期に開港五港に選ばれた新潟の玄関口である。新潟下町（しもまち）の「町あるきルート」を「日和山登山ルート」として紹介する。

旧新潟税関庁舎がある「みなとぴあ」を出発し、ゴールは「日和山」である。江戸時代は「新潟湊」、明治開港以後は「新潟港」と記される二つの「みなと」をたどるコースである。

出発地点はみなとぴあ

みなとぴあでは、水原の豪商が白山神社に奉納した「大船絵馬」の復元・複製が目を引く。下部には、年貢米を積み出している新潟、そして、左右に、江戸、大阪の様子が描かれている。よく見ると、最下部には、湊稲荷神社も発見できる。港に入った船は、この神社の森を目安に進んだと言われ、現在も漁業関係者等の信仰を集めている。

「新潟湊之真景」で、目的地「日和山」の文字を確認したら、さあ出発。

湊稲荷神社

この神社は、回すことができる「願掛け高麗犬（こまいぬ）」が有名である。港がにぎわっていた頃、町の人たちは、船乗りが遊びに来ることを願っていた。町が潤うからである。つまり、船が出航できないように願い、高麗犬を西に向けたと言う。この「逆風祈願」は、他の北前船の寄港地でも同じような風習が見られるとのことである。

金刀比羅神社

移動は、堀や川の跡である曲線道路。緩やかなカーブが過去の流れを物語る。

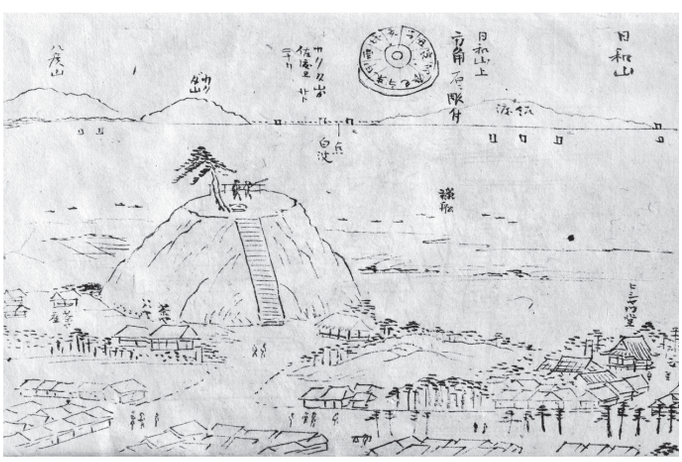
次は、金刀比羅神社。こちらは、航海の安全を願って建立された。大阪から新潟へ向かっていた北前船が難破しそうになったとき、金刀比羅大権現が現れ、船を救ったとされる瞬間を表現した「難船彫刻絵馬」が飾られている。なかなかの迫力である。

願随寺

「新潟湊之真景」にも記されている寺で、外国人を応接する場所となり、新潟最初の対外交渉の場としての役目を果たしていた。外国人に緊張感を抱いていた当時、郊外で対応しようとしていたことが想像できる。ここは、平地と砂丘地の境目に位置するのである。その証拠に、ここから松がたくさん植えられている。いわゆる砂防林である。

開運稲荷神社

徐々に坂を上り、開運稲荷神社へ。この神社は、長岡藩の米蔵の守り神だったそうだ。「こんこん様」と呼ばれる一対の狐の石像がある。荷物を降ろした船は安定性を失うため、重りとして石を積んだ。出雲の回船が重りのために積んできた出雲石で作られたこの「こんこん様」は、両足をなでるとご利益があるらしい。



「北国一覧 写 出羽越後」天保２（1831）年（日和山五号目所蔵）

※五年理科（学校図書）八四ページにも掲載されています。

日和山

目的地である「日和山」は、江戸時代の新潟町で一番高かった場所であり、麓には茶屋もあった。標高は一二・三m。登ってみると、海は見えないが、周囲と比して意外と高いことが分かる。大河が運んだ砂による砂丘の地形の変化により、海が見られなくなった「日和山」は場所を移した。現在海岸の高台にある「日和山展望台」の場所は、明治以降に海を臨む茶屋等が移った場所で、「新日和山」と呼ばれた。「日和山」には、江戸時代に吉田松陰も登っている。明治のはじめには、英国の女性旅行家イザベラ・バードも、訪れた可能性があるらしい。「日和山」は、みなとまち新潟の名所であった。

日本の沿岸各地には約八〇か所の日和山がある。でも、北前船の行き交う時代の、みなとまちのシンボル「日和山」がそのまま学校名になっているのは、日本全国で当校のみ。勤務校を心から誇りに思える。

以上、総移動距離二km弱の日和山登山ルート。みなとまちの歴史を感じる名所巡りを、是非一度。

協力　野内 隆裕 様
日和山小学校応援隊（学校支援ボランティア）

県小学校長会
HPへアクセス
学校経営に役立つ
情報満載